

あを 4

2021



山巡り 須賀忠男



妙義山 1104m

群馬県松井田町の

南西に立つ岩山

その下を中岳神社から妙義神社へ
岩壁を登ったり眺めたりして
歩く楽しいコースです。

四月集

マスク

佐藤 喜孝

マスクしてみんな麗人春の町

つけ忘れ家に戻りてマスクして

エタノール指紋全消し習近平

あるかなしの雨の向かふは春茜

浅蜷パスタせうがないから箸を割る

ひよどりが羽蟲にゆづる花の枝

小松菜の咲きしかたへの夕長し

春禽のいさかひてゐる手を出さず

秋雨と正對面に夜にめざめ



尋常小学校

須賀 敏子

枝垂梅此処に尋常小学校
遠目にも黄の鮮やかにミモザ咲く
二種類の椿の落花暮れ泥む
城山のかくれ小道の落椿
マンションのモデルルームに春日さす
余寒かなスー・チーさんの髪飾り
草萌やスニーカーにも解れあり
断捨離の始まらぬまま二月尽

花粉飛ぶ

田中 藤穂

春めけばたちまち花粉飛ぶニュース
鎌倉へしばらく行かず実朝忌
春大根酢漬け土産に友の来る
手焙りに海苔焼く用もなくなりし
雨戸閉め少し日の伸びしと思ふ
臘梅を見にゆく馬車の動き出す
傳茶房臘梅はもう終りしか



春雪

長崎 桂子

屋根の積雪三センチはや解けし
寒あやめのやっと蕾希望得る
リモコンの電池とり替へ春立つ日
三寒四温陽射きて嬉しかな
初午やみたらし団子齒応へ良し
家庭菜園崩れて草芽立つ
風静め普く日差し梅だより
薄日さし春雪ちらちら舞台めく



如月

森 なほ子

夕暮は青空戻る春の雨
春立つ日うたふと決めし「早春賦」
立春の風の強さにきらめく葉
凍返る女性蔑視の根の深き
春浅し壁より壁へ日の移り
春眠の遥かな旅を戻りけり
鎌倉の芽吹うながす風荒し
枯尾花根元に新芽抱きて立つ
前号正誤
白鳥の首直線に曲線に



諏訪湖

赤座 典子

佇まふ八重垣姫に春の鳶
スワンボート待機中なり春の湖
湯上り処方位盤あり遅日かな
どこまでも漣少し春夕焼
朝霧の晴れて輝く北アルプス



春の地震

秋川 泉

眠られぬ大寒の夜を鳥鳴く
節分はどこへも行かず鬼も来ず
寒明けや朝一番の猫の貌
知らぬ間に昨日だと聞く春一番
日の射さぬすき間にちらり梅見かな
猫のふむチュールリップの芽ひしゃげをり
猫たちも異変にまどふ春の地震
追ふほどに根元の見えぬ春の虹
前号正誤
修正会や大般若経声響く



川鵜

大日向幸江

パン嚙るマクドナルドに受験生
鬼は外窓の明りに訝せり
嬰兒の視線の先にチューリップ
日曜の朝のニュースに潮干狩
春爛漫雀と鴉睦まじく
良く嚙んで一言多し蓬餅
締め括る一文字探す花の雨
春の川遡りたる川鵜かな



十年

七郎衛門吉保

再びの揺れに怯えて二月尽
再補強した本棚に春日差
避難指示続き泣きいろ梅の花
汚染水また風評の原発忌
十年が区切りとならぬ東北忌
十年や歌ひ継がれる「花は咲く」
津波からコロナに継ぐや「花は咲く」
コロナ禍を理由に雖も箱の中



祝傘寿

篠田純子

花の雨傘寿のもとに集ふ「あを」

梅が香や完治と思ひ込む寛解

七十路の縄跳びダンス冬日向

自治会のリモート会議春寒し

襷つなぎ胃液吐くなり冬日影

「青衣^{しょうえの}の女人^{にょにん}」と過去帳読むやお水取り

梅二輪テニスコートに声戻る

筆持ちて「よさり」にサイン木枯忌



「新社員」抄・「残菊」抄（完）

篠田大佳

少年の雑談手話にて春浅し

春の暮降車サインを躊躇へり

路傍なる蒲公英ひとつ摘みて笑む

春シヨール声は笑つて歩きをり

桜まじ人の気配のない普請

夜桜や看板猫の出かけをり

ピンボケの夜景さくらはくつきりと

漆黒に手を振るメイド遅桜



採集

春の月窗を開けろといふてゐる
 三宅坂だらだらのぼり桜かな
 着ぶくれて歩幅小さくなりにつり
 お元日外出すなど云ふお触れ
 初場所やコロナの故に寥として
 潜くとき勢ひつけてかいつぶり
 映像に曾遊の街福寿草
 初詣すれちがふ人皆無口
 西病棟遥か彼方に雪の富士
 不条理の跋扈再びやコロナ寒

佐藤 喜孝
 篠田 大佳
 須賀 敏子
 田中 藤穂
 長崎 桂子
 森 なほ子
 赤座 典子
 秋川 泉
 大日向幸江
 七郎衛門吉保



初すずめ七羽来たりて初喧嘩
 令和三年政府公認寝正月
 乗り越えるためにある危機水仙花
 遅れつく賀状や友も高齢に
 ゆるゆると英気養ふお正月
 つまらなし糖度保障といふ蜜柑
 日常か非日常かと去年今年
 ストープの灯油つきさう針仕事
 携帯に食べ方を見る土筆んぼう
 伏せ置くや白磁茶碗の寒浅間山

篠田 純子
 篠田 大佳
 須賀 敏子
 田中 藤穂
 長崎 桂子
 森 なほ子
 赤座 典子
 秋川 泉
 大日向幸江
 七郎衛門吉保

喜孝抄



永き日を石を動かし昏れにけり

佐藤喜孝

一日中、石を動かす事に集中している。只々。時折力を入れるが、概ね静かな精神状態である。他人に言われて仕事をしている訳でも無く、側から見たら必要のない事かも知れない。只管。哲学のような掲句に惹かれた。(純子)

京にはおよそ二千と寺の春

佐藤喜孝

近所の散歩で寺を見かけた時の景でしょうか。近所の寺から、重厚な寺々が作者の脳裏に浮かび上がる様は連想の面白さです。(大佳)

水槽に蛙ゆつくり浸かりけり

篠田大佳

両生類の肌は馴染めないが、嫌いではない。モリアオガエルの泡状の卵を見た事もあるし、冬眠明けのヒキガエルの、ふらふらしているのも見た。蛙合戦の大騒ぎも、面白い。轢かれてぺちゃんこの蛙も哀れである。掲句の蛙はのんびりと生きている。作者の平穏な生き方の願望かもしれない。(純子)

白いコートの彼女は傘もささずに歩いてた

篠田大佳

俳句といふ器からこぼれさうな作品。「歩いてゐた」でなく「歩いてた」と留める俗語体。普段着で生な心の言葉である。ひとりの白いコートの彼女を凝視する作者。いつか私から消えてしまった感情だ。正直ともしひと思った。(喜孝)

エンタシスの柱しぐるる丸の内

篠田純子

丸の内から、丸ビルやKITTE（東京中央郵便局）などの歴史の長い建築を想起しました。「しぐるる」に抑圧された感情を読みました。(大佳)

皇居のお濠を前にして建つ「明治生命館」。一九三四年に完成、一九九七年に国の重要無形文化財に。総ガラスビルなどの高層ビルに囲まれながら、泰然としてゐる「明治生命館」。混泥土も時代色を帯び時間の重さを伝へ辺りを睥睨してゐる。時雨の中に立つ姿に純子さんは美を見つけた。外壁に高々と伸びるエンタシスの柱は選ばれたものの美しさがある。一度見てみたい。(喜孝)

冬の旅終へてホームの狭山そば

須賀敏子

「狭山そば」は駅そばの屋号のようです。冬の旅も無事に果たし、帰郷時に故郷を味わっている

安堵の様子が伝わってきます。(大佳)

シャツを干し隅の枯草抜きすてる

田中藤穂

干し、抜き、すてると、動詞三つに、作者のテキパキとした動きが見えてきます。先を見越す行動、合理的な思考と、作者の若々しさに、私はいつも煽られています。(純子)

大輪に冬薔薇の咲きコロナ増ゆ

田中藤穂

冬薔薇の鮮やかさと蔓延していくコロナウイルスへの不安の対比と読みました。冬薔薇の開花とコロナウイルスの蔓延は、種の広がりとして響き合っています。(大佳)

極月やリュックサックに旅恋し

長崎 桂子

旅へ出る前の高揚感とも、旅に出れない焦燥感とも読めます。いずれにせよ、リュックサックに旅への想いが詰まっていってどんどん膨らんでいる情景を読むことができます。(大佳)

新築の窓みな灯り聖夜更く

森 なほ子

あちらこちらでクリスマスの家族団欒の様子が伺えます。「新築の窓」に、ご近所の家庭事情の想像が膨らみます。(大佳)

「イマジン」よ割れし目鏡よ開戦日

赤座 典子

12月8日は、ジョンレノンの命日でもあります。「よ」の繰り返しに、作者の無念さが伝わってきます。「イマジン」はこれからも歌い継がれていく事でしょう。音楽の不滅の力と、戦争の愚かさの対比の句と思いました。(純子)

抑へゐる旅への焦がれ竜の玉

赤座 典子

旅に出られない焦燥を鎮めているという句ですが、竜の玉の青でどのように気持ちを抑えるかを読者の感覚に訴えかけてきます。(大佳)

大声やふたり乗りする息白し

秋川 泉

青春映画の一コマを見ているようです。自転車の二人乗りは一回だけやったことがあるのですが、二人乗りにも技術があつて、二人乗りに慣れていること、相当に気心の知れた仲でないと成り立たないことを知りました。(大佳)

屋根職人ふるまふ為の栗ご飯

大日向幸江

学生時代、消防設備を点検する仕事をやったことがあります。点検が終わってお客様から麦茶一

杯でも振る舞われるのは、なんだかんだで嬉しいものでした。一日中働いてくたくたなところに栗ご飯ときたら、お腹も体も喜ぶこと一入です。掲句は振舞う側の立場ですが、職人をもてなす方にも気配りがあるんですね。（大佳）

独楽回す技を忘れぬ昭和の子

七郎衛門吉保

昭和の子は器用なですよ。平成や令和の子相手に圧勝している様子が見えてきます。鑑賞者もベーゴマとけん玉を学校で教わりましたが、不器用で上手くできませんでした。遊びの不器用はいずれ克服したいです。（大佳）



佐藤喜孝

須賀 敏子

下萌や今日六千歩良しとして
下萌や野仏の顔優しげに
春陽満つ百舌の沈思に足を止め

○歩くこと、歩くことができることはなんと素晴らしいことかこの頃つくづく思ふ。「万歩計」なる小道具がある。名にあるから一万歩を目標にしたものだらう。今日は一万歩に足りぬ六千歩だが「良しとして」と散歩を切り上げた。余力はまだあるのだが。

○前句の続きのやうな句。下萌えの道の辺の野仏。風雨にさらされた顔は、春めいた辺りの草木の相のなかにやさしげに見える。敏子さんの心の反映でもあらう。

○百舌が枯木に身じろぎもせず止まってゐる。辺りは「春陽満つ」のどかな景。人と鳥との言葉を介さない会話である。

田中 藤穂

山脈のやうな雲あり街早春
春一番わが家の庭にいつ吹きし
梅咲くはも少し先と御住職

◎私もよくこの様な景に出会ふ。西方の、奥多摩方面に山影だか雲だか定かでないものが見える時がある。この句にはこの様な迷ひはない。春の喜びを感じるゆったりとした作品である。

◎朝起きて庭に出る。いつもの庭のやうすとどこか違ふ。木の葉がいやに散らかつてゐたり、立てかけてあつたものが倒れてゐたりと。知らぬ間に春一番が吹いたのかもしれない、と気づく。春一番を直に詠まないで春一番を詠まれたおもしろい作品。

◎顔なじみのご住職様との会話か。時候のあいさつなどされてもお寺さんはさすが風流である。梅の花を話しの中に取り入れ閑かな語らひのやうすが彷彿する。

長崎 桂子

春夕べ親し山並み見て暫し
深夜便ピアノ演奏「二月の海」

梅の香の丘ありし日の友と椅子

○「夕長し」といふ季語にもあるやうにゆったりとした春の夕べ。「親し山並」は「いつも見て親しんである山並」といふ意。春の夕べの落ち着いたひと時である。「親し山並」は少し詰めすぎ。例へば「親しき人」を「親し人」とは云い難い。下五「見て暫し」を「暫し見て」にしたい。「暫し見て」は、見てから暫し何かをしたやうことになり不安定。

○桂子さんらしい表現。動詞、形容詞を使はぬ乾いた表現。「二月の海」がわからなければ桂子さんの句意にたどり着けないのでしらべた。「二月の海」と題する曲は一つではない。ピアノ演奏といふヒントがあつたのでたどり着けた。「February Sea/George Winston」だと思ふ。深夜便にふさはしいスローテンポ、アルペジオの上に静かなメロディが乗ってゐる曲だった。桂子さんはこの曲に感動し一句作られたのだらう。

◎梅の香に満ちた丘。どこにあるのだらう。桂子さんには、はつきりわかつてゐる。その丘にあるのは「在りし日の友と椅子」なんと象徴的ではないか。そしてそこにもうひとり桂子さんが居られる。無駄のない表現の佳品である。

森 なほ子

恋猫となれず長生きこたつ猫
百千鳥長き眠りの古墳群
春眠の夢に自肅はなかりけり

○「へいのち短し 恋せよ乙女」と歌ひ出す「ゴンドラの唄」ではないが猫とて同じだらう。猫は猫として、なほ子さんはどうなのだらう。長生きだけが人生ではないよといつてゐるやうにも読めた。

○「眠り」なら醒めるが、「長き眠り」はさうではない。小鳥の囀とその下に長き眠りの古墳群と取り合はせた。「百千鳥」も「古墳群」も複数のにぎにぎしさに、長き眠りから覚めて仕舞ふとかもしれない。

○どんな夢だったのでせう。睡眠時に見る本当の夢は自肅とは無縁と作者はいふ。この辺りを心理学ではなんと云はれてゐるのかは知らない。世情頻繁に使はれてゐる「自肅」一語で世の中に抵抗してゐるやうだ。「春眠の夢」は、ここまではつきりと期待とか希望の意味の「夢」とは違ふのだと詠まれたのだが、「春の夢」でもよいのではと思つた。

俳句も夢の一つ。自肅は無用だと思つてゐる。

赤座 典子

春浅し全豪オープン無観客
春の雨めがねのふつと曇りける
二月の地震ランプシェードの翻る

○「全豪オープン」はオーストラリアのメルボルンで開催されるテニス大会。今年は大阪なおみが二度目の優勝をした。表現が少々事実につきすぎてしまった。典子さんはフランスまでテニス大会を見に行かれるテニスファン。その賑やかな大会の様子を知つてゐるので、無観客との違ひを具体例で描いてみては。打音の響き具合、足音、選手の息遣ひなど無観客でなければといふ句を、典子さんには詠めると思ふ。

◎一転典子さんらしい繊細な句。春の雨と眼鏡が曇るのとは直接には関係はない。「ふつと曇りける」なのである。春の雨のアンニュイな感じを見事に捉へ表現されてゐる。

○ランプシェードが「揺れる」ではなく「翻る」といふ動詞で大きな揺れの地震であることがわかる。地震を詠むとき季語に苦勞する。「二月の地震」には苦勞は伺へるがいまひとつ詩語になり切れない。

秋川 泉

春の地震五臓六腑に粥の味
路の臺郵便受到に届きたる
二の午や粒チヨコレートお供物に

○地震の去ったのちホツとして食事をしてゐるところか。あるいは炊き出しのお粥のやうにも読めた。どちらであらうか。

○直球俳句。少し変化を付けたい。「かがやいて郵便受に露の臺」と。「届きたる」は「郵便受に露の臺」で伝はるので「かがやいて」以外で推敲されるとよい。または「露の臺郵便受に○○」と○のところに泉さんが受け取った最初の感覚、感動をリプレイしてみても書かれてもよい。楽しみがいのある句である。昔フジオで山口誓子の講演を聴いた。耳に残つてゐるのが「初めに感動ありき」であった。何も云はないで感動を伝えるときもあるが、云はなければ伝はらない時もある。届いてうれしいといふことは分かるが、どううれしか、これがわかると泉さんの作品になる。

○この欄で毎月いくつかの語彙が増えていく。なんでそれがと思はれることがわからない。「粒チヨコレート」も「壊れチヨコレート」のことかなと思つたが、歴とした商品群。板チヨコ。粒チヨコといふことだった。お稲荷さんには油揚げと決まつてゐたのが今は粒チヨコなどがお供へされてゐるといふ。お供物は變つてもお稲荷様を大切にすることは変らない。

大日向幸江

透 通 る 春 夕 焼 や 西 病 棟
春 う ら ら 金 の 鯨 鉾 お め か し す
春 満 つ る 明 け の 明 星 輝 く や

○「透通る春夕焼」は魅力的。空気が澄んでゐるのだろう。夕焼とともに西病棟を見てゐるのか、それとも西病棟から夕焼けを見てゐるのか比べてみた。前者にした。西病棟のおおいさが被さってくるやうだ。

○季語がいい。高いところにある鯨鉾も間近で見ると意外に大きくて驚く。この句の鯨鉾は屋根の上に設置されたままにおめかしをしてゐる。鯨鉾も誇らしげに見える。このやうに季語を私も使いたい。

○下五の「や」は難しい。「春満つる」にしても自分のものとして言葉を使ひたいのだ。明け方の空を眺めてゐると藍色が少しずつ薄くなつてゆく。甕覗きのやうにかすかに藍の残つた空にかかる有明月はなんともいへず良い。この句は月ではなく星。輝いてゐるのはまだまだ夜の名残を引いてゐる空にかかる明星。幸江さんの身中も春の満ちてゐることであらう。

七郎衛門吉保

紅 梅 や 大 地 に そ ぼ ろ か け ご 飯
繁 菱 や 這 ひ て 大 地 の 家 紋 ふ う
春 色 の 筆 記 用 具 の カ シ ャ カ シ ャ と

○美味しさうな見立て俳句。七郎衛門吉保さんにはきつとよい思ひ出がそぼろかけご飯にあるので

せう。

そぼろは素臙と書く。私の頭の中ではピンク色をした鯛のそぼろしかない。でこの句とピッタリなのだが、ネットでは全く見つけれない。今の人にはわからないのかもしれない。思はずも郷愁の俳句になってしまった。

○続いて見立て俳句。はこべはどこでも見かける親しい野草。上から見ると家紋のやうに見えた。「家紋ふう」もよいが「○家紋」と云ひきるのもあり。

○新学期の準備。あたらしい筆箱に明るい色彩の筆記用具を入れてはしゃいでゐる。新学期といふより新人生かも知れない。

篠田 大佳

春立つや泥んこになるスクーター

うららかや上長さんのひとりごち

春あかね霞ヶ関に機影あり

○オフロードを楽しむに走り回ったスクーター。それを見て春が来たといふ感興をもった。子供は泥遊びが大好き、スクーターに乗れる歳になっても人の本性は変らぬやうだ。近頃はスクーターよ

りオートバイの方が町で目に付く。

◎「上長」は私にとって新語。「カミチョウ」と読むのかと調べたら「ジヨウチョウ」と読み、目上又は年上と知った。「上司」と「上長」の使ひ方の注意も書かれてゐた。この句、「上長さん」と親しげに詠まれてゐる。たまたま耳にした上長さんのひとりごと。会社内の人間関係で「うららかや」とはすばらしい環境だ。

○「春あかね」を「機影」とのからみで日本軍の練習機と読んでしまった。「春茜」は春の夕暮れ時の茜色の空、春の夕焼。「機影」といはれると民間機かもしれないのだが、軍用機を想起する癖がある。お役所の象徴「霞ヶ関」のビル、春あかねの空に現はれた機影。美しさだけを狙った作品なのだろうか。作者の意図するところは別にあるのだらう。





「坂の上の図書館」

篠田大佳

坂の思い出を書き出すと切りがないので、学生の時に覚えた図書館遊びについて書いていこうと思います。

東京都内には坂の上の図書館が多くあります。自転車で坂を上り、図書館の入口で息を切らせることが多かったです。特に、文京区の坂は大変でした。

検索が便利になって、図書館へは予め目的を持って訪ねることが多かったのですが、書棚を目的なく歩くのも楽しみます。国立国会図書館は年々資料の電子化が進んでいき、待ち時間に電子資料を読むことが増えました。『暖流』も電子化されていて、何冊か読みました。

大きな図書館には食堂が入っていて、国会図書館は社員食堂、都立図書館は学生食堂程度の価格帯でした。食堂で食事をすると、遊園地に行ったような高揚感を覚えました。後年、父が国会図書館の食堂で働くようになるとは思いもしませんでした。その食堂も疎遠になりましたが、二〇二〇年に閉店となったようです。



名寄の春

須賀敏子

高校の三年間を北海道名寄市で過ごした。

冬はマイナス三〇度にもなる盆地で、春は五月になってからである。梅、桃、桜が一斉に花を咲かせ、山には辛夷の花が白く輝く。いよいよサイクリングの季節になる。六月になるとたんぽぽが咲いて、空地には黄色の絨毯の様に広がる。校庭の隅には藍色の勿忘草が咲いていた様に記憶しているのだが……

もう一度この季節に帰りたいと常に思っている。

三月

大日向幸江

若々しい麦の穂に少し冷たさが残る風。明るい空に乳母車。人も自然も生き生きとしている。そんな普段の送れる事は何よりの宝だ。日本の四季がそしてなにより春が、三月が好きだ。

椿餅

田中藤穂

御近所の真綾ちゃんから「椿餅作りたいんですけどおばさんの家の椿の葉っぱ少し戴けますかと。」と電話がかかってきた。「どうぞどうぞ。」というわけで私も椿餅のお裾分けに与かった。その話をすると「椿餅って知らない。」という人が多い。昔は和菓子屋の春の店頭に鶯餅や桜餅と一緒に並べられたのだが、今の若い人はインターネットで調べて昔のものを掘りおこしているらしい。和菓子屋もお煎餅屋もパン屋も焼芋屋（夏は氷屋）も家のすぐ近くにあったあの頃は楽しい町だった。

花の寺

秋川 泉

「大日如来のお力で、どんどん――花が咲いてくるよ」と、深呼吸しながら父が云う。
朝、雨戸を開けると縁側の前庭から素晴らしい花々のおりが家の中に流れてくる。水仙、風信子、鈴蘭などの花々をうつとり眺め、しばし大日如来の恵みを感じる。
草花を絶やすことのない花の寺。春の花園そのものが、四季折々の花々がいつもそこにあった。それが私の幼い頃の思い出である。

春の味

篠田大佳

テレビの俳句講座を見ると、「俳人は季節を五感で楽しむ」と教わります。
僕は季節に対する意識が低いまま過ごしてきましたが、少しずつ季節の言葉を勉強しています。味覚はそのひとつです。偏食なので、あまり食べることに広がりがないのですが、以前、泉さんから浜防風をいただき、天ぷらにして食べました。甘さがあつてとても食べやすかったのです。すっかり好物になりました。また、先日、母が路の臺の天ぷらを作ったので、ひとつもらいました。苦味に癖がありましたが、良いアクセントだと思います。冬を耐えて春になった喜びが、春の味覚から感じられます。

春に成りにけり

佐藤喜孝

茜うらふきかへす春に成りにけり 耕月

最近柴田宵曲『占句を観る』で知った句です。なぜか甚く気に入っております。『田家春』と前書がある。正に蕩々たる天下の春である。」と書きだしてゐます。そして末尾は「あるいは天下の春は彼にあらずしてこれにあるのかも知れぬ。」と締めてゐます。名句にして名文。なほ、「茜裏」は「茜木綿の裏地、田舎ものの女性を意味すること。紅絹裏の安価版なのか。

兵

敗戦日語らふ友は帰還兵
料峭や墓憲兵と彫られあり
皇帝も兵も幻花さばてん
海底を兵隊さんが進む夏
三味線の兵隊稽古日雷
八甲田兵士の姿夏の檜葉
亀鳴くに似て衛兵の忠烈祠
衛兵の「ジュピター」奏つ夏の空
衛兵に百舌鳴くイギリス大使館
敗戦日兵隊さんの父の文

塀

青梅雨や萩の城下の築地塀
七変化猫が伸びする塀の上
横丁の古板塀の鳳仙花
白菜のたがひちがひや塀の上
掘割も塀もかたぶき猫の恋
黒塀に沿ひて桔梗の箱育ち
塀舐める探照灯の冴え返る
で塀の柿いつも見上げて通る道
きさらぎや忍び返し塀つづく
青鳶の千切り捨てあり塀の外
片陰は塀よりも濃く存在す

鎌倉喜久恵
田中 藤穂
須賀 敏子
佐藤 喜孝
篠田 純子
七郎衛門吉保
七郎衛門吉保
森 なほ子
田中 藤穂
赤座 典子
芝 尚子
鈴木多枝子
芝 尚子
赤座 典子
竹内 弘子
後藤 志づ
篠田 純子
斉藤 裕子
鈴木多枝子
田中 藤穂
佐藤 喜孝

塀越えて木槿むらさき新仏
板塀の陽の温もりし石路の花
さはやかやゆるりとたわむ築地塀
五月雨や塀這ふ草木青ふかし
秋めくや塀の真下に猫落ちる
ブロック塀俯きがちの日傘かな
苦瓜や隣の塀で元気なり
神楽坂黒板塀も冬に入る
板塀を猫の擦りゆく十三夜
板塀を越え白梅の枝垂をり
ブロック塀一齣欠けて雪柳
外科の塀白さるすべり咲きつげる
カサブランカ二輪車首出す塀の外
空蟬の縋りつきをりブロック塀
掘割も塀もかたぶき猫の恋
板塀へ鬼の背中に冬日射
去年の月境の塀を猫あるく
枝垂梅黒板塀の華やぎて
朝毎にブロック塀の蟬の殻
屋敷街塀の内なる柿の赤
冬芽濃き蔓の勢ひ塀を越ゆ
青鳶を褒めてゐる声塀の外
加賀町の塀より高く芽吹く木々

渡邊 友七
須賀 敏子
篠田 純子
長崎 桂子
竹内 弘子
篠田 純子
須賀 敏子
田中 藤穂
竹内 弘子
須賀 敏子
須賀 敏子
竹内 弘子
早崎 泰江
山莊 慶子
竹内 弘子
佐藤 恭子
竹内 弘子
須賀 敏子
山莊 慶子
七郎衛門吉保
長崎 桂子
田中 藤穂
佐藤 恭子

平安

世の平安海鼠はふかく考へる
平安を祈りつつける原爆忌
平均
平均台はらはらせる運動会

平家

瀧の中ときどき平家琵琶ひびく
春の夜や上原まりの平家琵琶
鬼灯や平家の裔の隠れ里
平家琵琶秋の夜長を弾語り
平家村きれいに雪の残りをり
滝の音平家の縁語りをり
横笛も琴も平家や今日の月

平行

秋深し平行線のまま曲る
平行に生きても二人秋さうび
夜学生平行棒の夜と昼
吊し雛人の動きと平行に

米国

独逸から米国からも春の風

閉鎖

台風12号東京湾19水門閉鎖

平和

定梶じょう
渡邊 友七
早崎 泰江
佐藤 喜孝
木村茂登子
田中 藤穂
木村茂登子
佐藤 喜孝
芝宮須磨子
木村茂登子
東 亜 未
須賀 敏子
七郎衛門吉保
長崎 桂子
佐藤 恭子
篠田 純子

平和願ふ心切なり去年今年
沖繩や平和の礎明易し
長崎の平和の鐘や雲の峰
柿蜜柑供へて平和いとうれし
ぼんやりの平和あはあは去年今年
百日紅平和を願ひ黙禱す
柚子浮かべ平和を思ふ夕べかな
芒原平和を願ひざわわざわ
平和なり小さき庭にも墓のゐて
秋の昼平和の橋が錆びてをり
べえべえ
落ちて地をべえべえと哭く鴉の子
ペガサス
月の道盡きてペガサス真正面

壁画

夢多き児等の壁画よ秋日和
晴続く壁画の如し冬紅葉

北京

柳絮とぶ上高地にも北京にも
鍵渡し北京へ発つ子春を待つ
灯さずに自転車ぐる北京の冬
聖火消え北京更待月かかく
新緑の北京PM2.5

栢森 定男
須賀 敏子
芝 尚子
藤野 寿子
須賀 敏子
大日向幸江
山莊 慶子
七郎衛門吉保
須賀 敏子
篠田 大佳
篠田 純子
鎌倉喜久恵
森山のりこ
長崎 桂子
赤座 典子
斉藤 裕子
堀内 一郎
田中 藤穂
秋川 泉

あとがき

「祝傘寿」

篠田純子さんから「祝傘寿」と題して

花の雨傘寿のもとに集ふ、あを、

を頂戴した。こそばゆかった。

私は十代の頃、よく云へば蒲柳の質で三十に辿り着けないと勝手に決めてゐた。それが分不相応に結婚までできて孫も授かり傘寿とは。お釈迦様も呆れてゐることであらう。しかしこの度のコロナの影響でこれ幸いと運動不足に拍車がかかつてゐる。そこで楽しみながらついでに運動になるかも押入から任天堂の「Wii」を出してテレビにつないだ。やったことのある人にかわからないが娘も婿も、息子も嫁も、そして妻もそこにゐた。テレビの前に立ちテニスやボウリングを楽しんでゐると知らぬうちに結構疲れてゐる。

純子さんの歳は忘れたが私と二日違ひの誕生日。おめでたうございます。

二つのコーナー

何とか少しでも遅刊を取り戻したく二つのコーナー

を休載してゐる。ひとつは「俳句の尾鰭」。この欄で書きたいこと、書かねばいけないことがあるのだが。もう一つは「佐藤恭子遺句集」。体力、気力と相談しながら焦らず気長（自堕落）にやらせてもらつてゐます。

日本名著全集・俳文俳句集 興文社版

昔、近所の古書店で見つけた天金の本。最近やっと読めるやうになった。千頁を越える分厚い本。鬼貫から一茶まで。芭蕉は別巻でひとり。ネット古書店で安く売られてゐる。装丁も素晴らしい。これ一冊あれば無人島で暮らせさうだ。昭和三年刊（来月に続く）喜孝

二〇二一年四月号

発行日

四月十八日

発行所

東京都中野区中央2・50・3

電話

090 9828 4244

ファックス

03 3371 4623

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット／須賀忠男・福井美佐子・テイリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円（送料共）／一年

ゆうちょ銀行（普）

（店番018）4586402

佐藤 喜孝（サトウ ヨシタカ）